

こころネット KANSAI × DIVE プロデュース公演

『あなたのとなりに』

上方文化笑学センター所員・社会学部 横田 修

2025年1月16日（木）～20日（月）に大阪の小劇場・ウィングフィールドにて、アルコール依存症を描くオムニバス劇『あなたのとなりに』が上演された。当センターは舞台の映像記録を担当した。

本演目は、人々が抱える「生きづらさ」に取り組む医療・福祉等の専門家だけでなく当事者や一般市民からなるNPO法人こころネット KANSAI（以下こころネットと表記）と、様々な地域の演劇人とネットワークを築きながら「創造環境の整備と舞台芸術の一層の社会化に寄与すること」を目的に活動するNPO法人大阪現代舞台芸術協会（通称DIVE・以下DIVEと表記）が連携して行うプロデュース作品である。

具体的な創作の進め方は以下の通りである。まず、こころネットのコーディネートのもと、DIVEに所属する劇作家3名が、アルコール依存症の当事者やその家族、医療関係者などの支援者に対し、約1年をかけて取材を行った。作家には「依存症当事者」、「当事者家族」、「ケースワーカー」という視点がそれぞれ割り当てられ、30分程度の新作短編戯曲を執筆した。その後、俳優オーディションが実施され、DIVE所属の演出家3名が稽古を進め、舞台作品を完成させた。

作者の中には、2015年にOMS戯曲賞大賞を受賞した高橋恵（虚空旅団）が含まれ、総合演出は2019年に文化庁芸術祭優秀賞を受賞した橋本匡市（万博設計）が担当。さらに、監修は劇団太陽族の岩崎正裕が務めた。大阪を拠点に活動する実力派の演劇人が結集した本企画は、全7ステージがほぼ満席となる盛況のうちに幕を閉じた。なお、筆者も微力ながら劇作メンバーの一人として参画する機会を得た。

映像記録を残す意義は、アルコール依存症について学ぶ機会を提供することにある。想定される鑑賞者は、学生や将来ケースワーカーを目指す人々である。

もちろん、演劇は創作物であり、戯曲は論文や教科書とは性質を異にするテキストである。決して正確な知識や正しい面接技法を示すものではないが、アルコール依存症という疾患を病い（illness）の観点から捉える上で、本作『あなたのとなりに』は鑑賞に耐えうるメディアとなり得ると考える。

病いは、疾患のような生物医学的な論理的体系にもとづく説明とはちがって、それぞれの病者がみずからの五感を通じて感知（perceive）したわずらいの過程でありその解釈であって、多義的な意味世界を包摂するのである。¹

なぜ本作『あなたのとなりに』が、教育を目的とした鑑賞に耐えうるメディアとなり得るのか。以下に論じてみたい。

一つには、物語の中心が語りによって構成されている点である。拙作『わらってゆるして。』の創作にあたっては、

1 蘭由岐子。「病いの経験」を聞き取る—ハンセン病者のライフヒストリー。生活書院。2017。p70



画像1・公演チラシ（表面）

あなたのとなりに

こころネット KANSAI × DIVE プロデュース公演

ふと、街に目を向ける。あくせくと行き交う人々は何処へ向かうのだろう。色々な人々が、様々な理由を抱え、街を歩き交っている。そんな街の「背景」にも目を凝らしてみよう。新発売のお酒を宣伝する広告、コンビニの冷蔵庫、居酒屋の赤提灯、酒屋の前の自転車…。街を歩き交う人々の背景に、お酒への誘惑の糸はどこまでも張り巡らされている。そんな街で私達は生活をする。歩き、置き、絡めどられ、ときに動けなくなってしまうこともある。それでも、人は生活をする。

今作は、人々が抱える「生きづらさ」に取り組む医療・福祉等の専門家だけでなく当事者や一般市民からなるNPO法人こころネットKANSAIとDIVEが連携し、3人の劇作家がアルコール依存症に関して現場で取材を重ねて書かれた3本のオムニバス公演です。それぞれの風景の中で生活をする人々の生き様が、この作品に触れた人達にとって、街に置かれた一縷の望みに繋がりますように。

『やがて窓辺にあかねさす』 (作) 杉山晴佳 あうん堂 (演出) 中川真一 演劇舞台二丁目



ある日の家族会終了後、初めて着の前で語った体験談がうまく運ばなかった男性の気持ちを家族会を取り仕切る女性が聞いている。更に忘れ物を取りに戻ってきた参加者も加わり、酒に囲まれた日常の中で病に向き合う家族のもどかしさにうずもれつつも、この病と前向きに立ち向かう日差しが雨上がりの部屋の窓辺に差し込んでくる。

(出演) 大西敦司
岡田望
木本牙狼
杉江美生 8.22企画
杉山寿弥 あうん堂
田中香織 こころネットKANSAI
得田晃子
三輪華蓮 造形門学院大学舞台芸術実践プロジェクト STEP
村尾オサム 演劇体
モトモトモ
森田祐利栄 エイチエムビー・シアターカンパニー
山下真実 舞臺プロ/虚空演劇

『SALT』 (作) 高橋憲 虚空演劇 (演出) 橋本匡市 万博設計



夕刻、入口の大きなガラス戸が割られ、補修のための段ボールをつなぎ合わせるケースワーカー。ガラス戸を割ってケガをした患者を病院へ運んだりと同僚たちも落ち着かない。そこへ患者の母親だという女が訪ねてきた。聞けば患者は隠れてスリッパ(再飲酒)し、再び病院に運ばれたという。落胆した母親をなんとか助ますケースワーカー。再び作業を始めると段ボールに紙片が挟まっているのを見つける。

監督=若崎正裕 [劇団今太陽旗]
舞台美術=サイカイヒロト [WIRE]
舞台監督=今井謙平 [(株)カンパニー]
照明=村田種子 [白いたんぼ]
美術操作=河西風歌
音楽=あなふみ [ウイングフィールド]
映像撮影=NOLCA SOLCA Entertainment
協力=造形門学院大学上方文化実学センター
宣伝美術=山口良太 [slowcamp]
宣伝イラスト=OTA Minaemi
制作=若田雄徳 [エイチエムビー・シアターカンパニー]
提携=ウイングフィールド
助成=芸術文化振興基金 他、大阪市
企画=NPO法人大阪現代舞台芸術協会
NPO法人こころネットKANSAI
製作・主催=NPO法人大阪現代舞台芸術協会

『わらってゆるして。』



断酒会の先輩を迎えに中年の男と女が老人ホームへと向かう。断酒表彰を授けられた二人は晴れ姿を褒められたのだ。しかし一向に部屋から出てこない先輩には、昨夜の外出先においてスリッパ(再飲酒)の疑いが…ホームの職員や若い精神保健福祉士と共に先輩を待つ間、彼らは酒と共にあった人生を振り返る。

(作) 横田修 タテコク企画 (演出) 早坂彩 トレモロ

2025年1月16日(木) — 20日(月)

1/16 木	1/17 金	1/18 土	1/19 日	1/20 月
19:00	19:00	13:00 18:00*	11:00 15:30*	13:00

★アフタートークあり
※受付は開演の40分前、開演は開演の30分前

ウイングフィールド



542-0083 大阪府大阪市中央区東心斎橋2-1-27
南明町ウイングス6F
●階段最上層横断して番出口を出て右折。
●階段を南へ約3分
●郵便箱横心斎橋駅⑧出口を出て東へ約10分

チケット (整理番号付き自由席)

一般	25歳以下・障害者	NPO法人大阪現代舞台芸術協会(DIVE)
前売 3,500円	2,500円	WEB https://ticket.corich.jp/apply/347552/
当日 4,000円	3,000円	Mail diveosaka@gmail.com
応援チケット(寄付) 1口 1,000円		Tel 090-9696-4946 (前田)
<small>※応援チケットで集まった寄付は、25歳以下・障害者チケットの劇団/公演にあてさせていただきます。 当日配布するパンフレットにお名前を掲載させていただきます(希望者のみ)</small>		※10:00-19:00

チケット取扱い・問合せ

●会場は靴を脱いでご入場いただきます。
●車いすのご来場や上演台本の貸し出しのご希望など、ご観劇に関してご希望やご不安なことなどございましたらお気軽にお問合せください。



NPO法人大阪現代舞台芸術協会 (DIVE)
NPO法人大阪現代舞台芸術協会は前身となる関西演劇人買合会を経て、阪神淡路大震災を大きな契機とし、主に関西小劇場に属する舞台芸術者たちによって1997年に設立。設立当初は、「演劇人同士の間でネットワーク作り」を主目的としていたが、時代が重なりつれ、より活動の幅を広げる必要性を感じ、2005年にNPO法人化する。現在は、次第に様々な地域の演劇人とネットワークを築きながら「創造環境の整備と舞台芸術の一層の社会化に寄与すること」を目的に活動している。

①@diveosaka
X@dive_osaka
ウェブサイト <https://www.ocpa-dive.com>



画像2・公演チラシ(裏面)



画像3・舞台『わらってゆるして。』（左より）村尾オサム、森岡拓磨、木本牙狼、杉江美生
撮影：河西沙織（劇団壱劇屋）

6名の当事者、3名の医師、9名の精神保健福祉士に対し、それぞれ約2時間のインタビューを実施した。本作は、当事者やその家族、あるいは医療関係者の語り（ドラマ）を紡ぎ、創作した戯曲である。もちろん、一言一句がそのまま使用されているわけではなく（インタビューのプライバシー保護のため）、すべての言葉を忠実に再現しているわけでもない。本作はドキュメンタリー作品ではないが、語りのエッセンスを可能な限り取り入れ、作劇を行った。その点は確かである。

二つ目は、専門家の監修が色濃く反映されている点である。稽古を開始した直後に行われる本読み（俳優たちが戯曲を見ながら台詞を読み合わせること）の段階から、稽古場を訪れたところネットの関係者、特にケースワーカー（精神保健福祉士）の皆さんから、リアリティに関する多くの厳しい意見を頂戴した。

通常、戯曲には台詞を含む役同士の相互作用が描かれる。今作に登場するワーカーが劇中で患者に向けて発する言葉や彼らへの接し方は、日頃から同様の仕事をしている人々にとって、その知見をもとに検証せずにはいられない対象であったのだ。むしろ、後進の者たちに舞台映像を見せることを考慮すれば、当然のことと言えるかもしれない。

指摘に対する対応は作者によって異なるが、筆者は指摘のあった箇所について、演出の早坂彩（トレモロ）と相談しながら周辺の台詞の修正や変更を行った（もちろん、指摘をそのまま受け入れたわけではない）。細部にまで行き届いた指摘は、一般的なドラマにおける専門家の監修を上回るほどであった。通常の創作ではあまり見られない過程ではあるが、そのおかげで学びに資する作品の完成につながったように思う。

ただし、繰り返すが戯曲は教科書ではない。描かれたやり取りにリアリティーがあればそれで良いかと言えば決してそうではないのだ（あえてリアリティーのない描き方をすることで本質を突く描き方だって存在する）。創作物としての戯曲とは、演劇とは、もっと自由な存在である。その点を十分に踏まえた上で、今作『あなたのとなりに』は、演劇が教育的な目的に資するメディアとなりうる可能性を実感できる企画であった。

筆者自身、アルコール依存症が疾患であることは知識として理解していたが、取材や作劇の過程を通じて、依存症当事者やその家族、医療関係者などの支援者がこの病（やまい）に向き合うことの困難さを改めて認識するに至った。映像記録の鑑賞者にも、同様の体験をしてもらえることを願う次第である。